

沼津市若山牧水記念館

第21号 1998.12.10

編集・発行 社団法人 沼津牧水会 TEL(0559)62-0424
〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11 FAX(0559)62-0424

若山牧水初期の作品(2)

春の日は孔雀に照りて人に照りて 彩羽あや袖鏡に入るも



明治38年の『新聲』

牧水は、明治三十七年四月、早稲田大学文学科高等予科に入学、十三日から登校を始め、四月二十二日には埼玉県の所沢在の入間郡富岡村に祖父若山健海の生家を訪れている。そして、五月二十二日に本郷西片町に尾上柴舟を訪ねた。牧水が投稿していた『新聲』の選者が柴舟で、牧水は上京すると間もなく手紙を出し返事を貰っていたのである。牧水は日記に「柴舟先生、温厚の君子然たる人なり」と、その印象を書いている。尾上柴舟は明治九年の生まれで、この時二十八歳。十三歳の頃から旧派の御所風の和歌を学び、日記風の歌を多く作ったが、落合直文に出会い、『あさ香社』の社友となって、和歌刷新の中心になっていった。牧水と出会った頃の柴舟は、東大を卒業して大学院に進み、哲学館(現

東洋大学)の講師をつとめ、また、金子薫園とともに『叙景詩』を出版し、当時隆盛の『明星』の歌風に対立する姿勢を明確にしていた頃であった。

前掲の作品は、明治三十八年一月、本郷の尾上柴舟宅の歌会に出されたもので、柴舟が選歌をしていた『新聲』(三月一日号)に発表された。この歌会は柴舟の選歌を受けている人達の集りで、正富汪洋(歌人・詩人。『新進詩人』を主宰。戦後、「日本詩人クラブ」創立の推進者としても著名)を中心とする哲学館の学生が多い会だったが、この作品が当日の最高点歌となった。このときのことについて、牧水は、鹿児島の鈴木財蔵に次のような書簡を送っている。

「……柴舟流の一派相寄つて金箭会といふのを起しました。第一回会合に出席してみました。皆駄目です……」青年牧水の気宇の壮大さが伝わって来ようか。この金箭会は後に車前草社となる。メンバーは、牧水の他に尾上柴舟・前田夕暮・正富汪洋・三木露風・有本芳水らで、『明星』の夢想的浪漫主義に対抗して自然主義に立脚する者の集りでもあった。なお、車前草社は、大正三年に柴舟を主宰者として『水鏡』に発展することになる。

『新聲』は、秀英舎・明治書院から独立した佐藤義亮(後に新潮社を起す)が明治二十九年に起した「新聲社」が発刊した短歌誌で、当時の文学青年の登竜門でもあった。

『新聲』に発表された牧水初期の作品を二、三紹介する。

病めば戸による日ぞ多き戸によれば母のみ国の島ほのみゆる
はるさめやしぶ茶草もち小雪洞ともの戀きく菜のはなの里

はかなくも人をおもひぬかかるとやすらむ野の月見草
明治三十八年から九年にかけて日本は日露戦争の真っ最中。大陸への進出、南満州鉄道の設立など、時局は次第に富国強兵から列強の仲間入りを画策し始めていた。文壇は自然主義への傾斜を深め、夏目漱石が『吾輩は猫である』を書き、上田敏が『海潮音』を出版。牧水は早稲田の英文科本科生として若い文人と交わり、学資不足に喘ぎ、夜は近所の子どもに英語や読み書きを教える苦学生でもあった。

(須永秀生)

第44回沼津牧水祭短歌大会講演録

牧水短歌の人間像

玉城徹

今日は、やっぱり牧水の話がよろしきろうと思ひます。

今日はまあ人間像ということをも牧水の作品によつて見て頂こうと思ひます。短歌は文学です。文芸と言つてもいい、芸術と言つてもいい。第二芸術といふことを桑原武夫さんが戦後に言われましたけれども、この第二か第三か第一かといふことは、これは作者によつて決まるのです。短歌だから第二だとか、小説だから第一だとかいふことはない。小説でも、三流の作家が書いてゐるのは第三芸術である。皆さんはいい作者だから、皆さんが作つてゐる短歌は、第一芸術でありましょう。(笑ひ)。



芸術とか文学とかいふものは、根本のところは人間に関わるものである。自然を歌うと言つても、科学者が自然を研究するように自然を見るわけではないんです。やはり人間というものを基礎に置いて、見るわけなんです。花鳥風詠と虚子は申しましたが、虚子はちゃんとそのことを知つてゐる。花鳥風詠と言つても、俳句はやはり人間の俳句である。文学である以上、人間に関わるものであるといふことを、明確に述べてゐます。人間を外にして、人間抜きで自然にむかうなどと、そういうことはないので。どういふ作品も、やはり人間に関わつてゐるものといふことができますけれども、その中で人間の姿、人間を客観的に見て人間の姿を歌つたものを、牧水の作品の中から抜き出してみるとどういふことになるであろうか、ということが今日のテーマであります。これは何時作つた、という細かいことは今日は申し上げません。一首一首の中身について考えてみたいと思ひます。作品に入りましょう。一番初めのこれは初期の歌です。

植木屋は無口のをとこ常磐樹の青き葉を刈る春
の雨の日 (『海の声』所収)

二句切れを、大変上手に使つてゐる。非常に自然

な二句切れです。「植木屋は無口のをとこ」。植木屋つていふのはだいたい黙つて葉を刈つてるものから、そう喋らないと思ひます。「無口」なんていう言葉を大変上手に使つてゐる。今はどうも難しい言葉を皆さんお使いになるんで、「寡黙」だなんて、「寡」の字が辞書を引かないでちゃんと書ける人が何人いますかね。無口つていふ言葉がありやあ、無口でいいでしょう。「植木屋は無口のをとこ」、黙々と刈つてゐるんですね。そこに一人の名もなき庶民の、そして別に悲しげだといふんじやあないけども、やはりその底には一つのさびしい流れがある。そういう人間像を牧水はここで取り出しているわけであります。牧水はロマンチックと言ひますけれども、ロマンチックの中に、自然主義の影響がございまして、こういう人間の姿をそのまま見てゆこうといふところがある。こういうところは、やはり牧水の一つの特質といふことができるのではないでしようか。二番目にこれも初期の歌ですけども『海の声』よりい

わがめぐりいづれさびしくよるべなきわかき
のちが数さまよへり (『独り歌へる』所収)

私のまわりの青年は、だれもさびしくよるべが

ない、たよりない。これは、多分、思想的な方面について言うのでしょう。これが明治末期の姿で、これは一人じゃあない。だれもかれも寂しくよるべがない。そういう青年達がさまよっている。啄木が「時代閉塞の現状」などという文章を書きましたが、青年が時代の中で閉塞して、どうしようふうに生きてゆくのか、苦悩したのです。藤村操のように、人生の意味が解らないと言つて、日光の華嚴の滝から飛び込んだ男もある。こういうふうな時代を背景に置いてみると、この時代の青年の姿つていうものが、自然に浮かび上がってくるわけでありませう。三番目に行きますと

ほこり落^{おち}日^ひの街^{まち}をひた走る電車のすみのひとりの少女^{をとめ}
 (『独り歌へる』所収)

これはたぶん東京の市電でしょうね。後に、都電と申しますけども、もう都電もなくなりまして。「ほこり落^{おち}日^ひの街^{まち}をひた走る電車」「ほこり落^{おち}日^ひの街^{まち}をひた走る電車」ということで、全体を纏んでいます。そこを、街つていっても寂しい街なんでしょうね。「ひた走る」というのは何だかひたすら走つて行く。沢山混んでいる時は、ひた走るなんていうことはあんまり感じないんですけども、おそらく乗客も少ないのです。「ほこり落^{おち}日^ひの街^{まち}」つていう把握の仕方は、なかなか簡潔で良い。「電車のすみのひとりの少女」、牧水は、をとめが好きなんだ。彼の歌つた人間像の中の幾つかはをとめです。この一人のをとめがどうだという様子は書いてないが、「電車のすみのひとりの少女」つて言うだけで、寂しげに電車のすみにいる少女の姿が浮かんでくる。これも全然知らない少女

でしょうけどね。見も知らない一人の少女の姿をここに出そうというのです。こういうふうには牧水は無名者、名もない群衆の中の一人、というふうな姿を非常に好んで歌つてゐるわけです。

ゆふ日赤き漁師^{いしや}町^{まち}行きみだれたる言葉^{ことば}のなかに
 入るをよろこぶ
 (『別離』所収)

これはまだ牧水が沼津に来る前でありませうから、多分千葉県かどこかだろうと思います。漁師達が叫ぶように話している。だいたい、漁師つていうものは普通のところでも声が大きい。太い、どうまごえというのですか、そういう声で叫ぶように話しをしあう。よく聞きとれもしないが、そういう声の中に入つて行くとか何かそこから生命感、自分でも分からないある生命感を受け取るような、感じがするんですね。「みだれたる言葉」というふうに言つてるところが、なかなか面白い。そういう姿の中から自分の方へ流れてくる、生命の感じ、これが「よろこぶ」である。「よろこぶ」というふうには非常に簡潔に、しかも当たり前前の言葉で言っている。分析的にいうと、面白くないんですね。牧水の短歌の良いところは、分析的でない、体の中から自ずから流れてくる調べが歌の中に入ってきていることであります。師匠の尾上柴舟が「君は天性の歌人である。いつの間にか古典の歌の調べを身につけているんだ」と言つて、大変褒めたことがあります。勿論牧水だつてやはり言葉には苦勞してゐるんですよ。苦勞してゐるんだけど、しかし作りものではなくて、自然に発する調べが牧水の中には生きています。これがまあ天性の歌人と言われる由縁であります。正岡子規は、「短歌は文

学でなければならぬ。文学とは何かというと、理屈でないことだ」と言う。理屈を排するつていうことだと。これは短歌の大道ですね。理屈から発した感情というものは面白くない。歌の調べになつてこない。「ゆふ日赤き漁師町行きみだれたる言葉の中に入るをよろこぶ」。非常に自然な二句切れです。「ゆふ日赤き漁師町行き」運用中止と言いますけども、二句で切つて、それから「みだれたる言葉の中に」とこういうように続きます。何でも三句切れでお読みになつちやう方がいる。「ゆふ日赤き漁師町行きみだれたる」と。これ何だかわかんなくなつちやう。歌会なんかでよくそういう読み方をされる方



第3歌集『別離』第2歌集『独り歌へる』第1歌集『海の声』

がいるんです。二句切れのものを三句切れにして褒める。それじゃあ意味が解らない。「ゆふ日赤き漁師町行き」「みだれたる言葉の中に入るをよるこぶ」。大変自然なんですね。

虚無党の一死刑囚死ぬきはにわれの『別離』を
読みみしと聞く
(『路上』所収)



佐藤緑葉と牧水

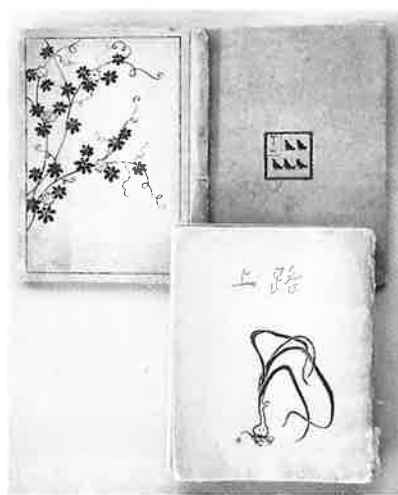
これもやつぱり「虚無党の一死刑囚」で切るので。「一死刑囚死ぬきはに」とこう読んではいけません。虚無党というのは大逆事件を起こした、平民新聞の人達の誰か一人でありましょう。ただ、この平民新聞社に牧水が多少出入りしていたことは分かっている。これは、あの牧水の友人の一人の佐藤緑葉というのが、どうも牧水ともう一人を連れて、平民新聞社に行ったことがあるらしい。このことは、荒畑寒村の『寒村自伝』の中に出てまいります。佐藤緑葉という人はちよつと面白い人で、私も興味を持つてゐるんですけども、まだ本を手に入れることができないでいます。戦後にこの方は、杉並区にお住ま

いになっていたそう。それから、牧水も『独り歌へる』でしたかね、『路上』でしたか、どつちかの扉のところに緑葉の息子にこれの歌集を送るという献辞が書いてあります。どういう事情でそれを書かれたかは私もよく調べてないんですが、そういうことで佐藤緑葉という人は、牧水研究の上でどうしても一回考えておかなければならない人であります。牧水が、どれくらいこの当時の虚無党、無政府主義です、ニヒリズムではありません、こういう社会主義思想に興味を持ったかということ、はなはだ不明です。牧水も無口の男で、ほかにそういうことを喋らなかつたし、当時は、喋ると非常に危険だつたということもあるんでしょう。政治向きのことはいまさら言わない人だつた。ただ、奥さんの若山喜志子さんは、これは塩尻の近くの方ですけども、女学校の時に、幸徳秋水の『社会主義神髓』というものを讀んだということが出てます。あの辺はわりあいと社会主義思想が早く入つたところでございますけども、そこで喜志子が『社会主義神髓』をどこから借りて来たのか、一つ疑問があるんです。少なくとも牧水にも喜志子にもそういう社会主義に対する興味が、若い時からありになつたと思ひます。ただし、それを露骨に言うことはできなかったであろう。晩年の若山喜志子は社会主義の方にかなり近寄つて行くんですけども、これもどのくらいなのかよく解らない。しかし、この死刑囚が「死ぬきはにわれの『別離』」を讀みしと聞く。死ぬ前に死に際その頃に、自分の『別離』っていう歌集を讀んでいたということ。あるいはこれは牧水に面識があつた一人かも知れません。ただこういう社会主義者が牧水の『別離』っていうものに何か心惹かれて讀んでいた。こ

の裏には何か牧水の思ひがあるんでしょう。それは露骨に言われていませんし、人の名前も出していません。ただそういう噂を聞いたという程度にしか言っていない。これは当時は危ないですからね、平民新聞社に出入りをしただけで、あと尾行がついたりするんです。あの当時のあそこに入出入りをした人達は、暫く尾行がついて、非常に苦しんだものであります。牧水が実際どうであつたかは、ちよつと分かりません。

また一人とほくには見ゆ荒磯の浪しるき辺に藻をつめる海女
(『溪谷集』所収)

牧水の二句切れは、おそらく天性のものでしょう。非常に二句切れが多いのです。この二句切れが上手く使えるということは歌の上で非常に大事な事なんですけども、この人は特に意識しないでやつてゐると思うのです。いつの間にかこういう二句切れを、自然に身に付けるような力を、牧水は持っています。また一人とほくには見ゆ」と先に言つてお



第12歌集『溪谷集』と第4歌集『路上』

て、「荒磯の浪しろき辺に藻をつめる海女」、こうい
うふう具体的に。これは海女の歌はここでは何首
もあるんですけども、遠くに見えている海女つてい
うものをこのように擲んでいる。これも全く無名の
名もなき民衆の一人、庶民の一人であります。海女
もだいたい牧水は好きで、海女の乙女が出て来ると特
に感激してしまつて、おしまいには手でも握りそう
な。……(笑い)。そういうところは面白いですね。

飲む湯にも焚火のけむり匂ひたる山家の冬の夕
餉なりけり (『溪谷集』所収)

これは三句切れです。これも有名な歌ですが、「飲
む湯にも焚火のけむり匂ひたる」おそらくアルミニ
ウム製の葉罐なんかから、ついでくれるんでしょ
う、落葉とかそんなものを焚いて葉罐をあたためた
んでしょね。それを「飲む湯にも焚火のけむり匂
ひたる」とそれだけで把握している。「山家の冬の夕
餉なりけり」。全体の雰囲気は非常につきり出て
いる。非常に自然ですね。これが牧水の真骨頂であ
ります。私達は、その場に引き込まれるような、た
だ画面を外から見ているのではなくて、自分も中に
入って行くような感じがする。そしてまた、そこか
ら調べによって心が解放されるような感じになる。

この解放感というものが、牧水の短歌の非常に大き
な魅力です。歌が素晴らしい歌人は他にも沢山いる
んですけども、牧水の歌は、読んでいるうちに心が
解放される。これが沢山の人に好まれるし、特に歌
人以外の小説家や知識人にも愛読者が多い原因にな
っていると思います。良い歌つていうことが分かっ
ても、心が解放されない歌つていうものもある。牧

水の初期だけ良いつていうふうに褒める方がありま
すけども、なかなかそうではない。真ん中の所も良
いし、終りの方も良い。だんだん酒飲んで駄目にな
ったなんて言う批評者もいますけども、そうじゃあ
ない。自分の歌が駄目になっているために、その弁
解の手段として、牧水もだんだん駄目になった、私
もそうだとはいいたいのでしょうか(笑い)。八番目

ひたひたと土踏み鳴らし真裸足に先生は教ふそ
の体操を (『山桜の歌』所収)

これも自然の二句切れですね、「ひたひたと土踏み
鳴らし」。ここで切れるんです、切らなけりやあ駄目
です。「真裸足に先生は教ふその体操を」。これはね
群馬県ですけども、牧水は歩きながら小学校の校庭
を見るんですね。「ひたひたと土踏み鳴らし」、上手
いでしょう。上手いけど自然なんだ。分析的じゃあ
ないんです。土の上に足音がした、そして先生も裸
足だった。「真裸足に先生は教ふその体操を」。この
「を」は感動の助詞です。「体操を」の「を」は、「よ
」に近いですね。体操を教えるつていう格助詞じゃな
くて、感動の助詞です。こういう歌はなかなか珍し
いし、よく先生の姿が出ている。

先生のあたまの禿もたふとけれ此処に死なむと
教ふるならぬ (『山桜の歌』所収)

禿げてる方にはまあ……「たふとけれ」と言つて
るんだから良いでしょう。そういう年取つた先生が
いる、「ここに死なむと教ふるならぬ」、ここで死の
う、それで、それはお前達も子供達にここで分を尽

くして死ねよと、これは後で直しているものもある。
「死ねよ」と書いているのもあったようです。ここ
で自分は、「自分の持ち場としてのこの田舎の土地、
ここを離れず死のう」と、こう言つて子供に教える
んだろう。この姿から先生の心持ちを汲み取つて、
先生の姿つていうものを出そうとしているわけなん
です。次に

菜をあらふと村のをみな子ごとく寄り来て
あらふ此処の温泉に (『くろ土』所収)

これも二句切れですね。「菜をあらふと村のをみな

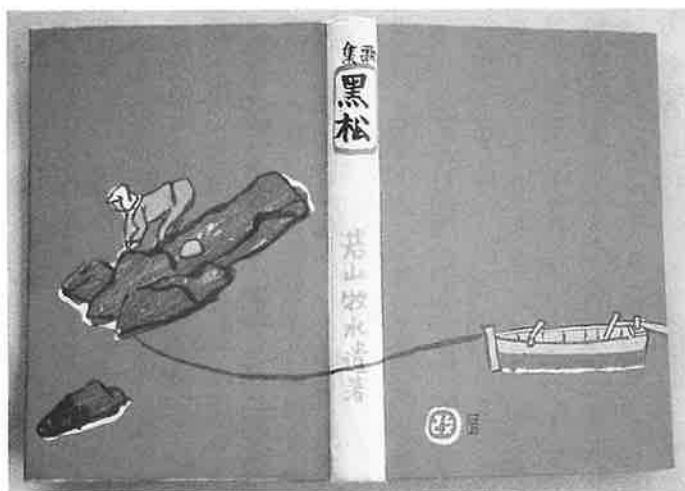


第14歌集『山桜の歌』と第13歌集『くろ土』

子」、「ごとごとく寄り来てあらふ此処の温泉に」。二句切れか三句切れかということとを区別するのは、三句が四句の方へ続いているか続いているかということとを御覧になれば良く分かる。ごとごとく寄ってきて、皆が寄ってきて洗うんだ。菜を洗うといつて、温泉で洗うっていうんですね。今はあまり見ないかもしれませんが、温泉場ではよく見掛ける光景です。これなんか何でもなさそうですけども、やっぱり小説の一場面にしてもよいような感じがある。そしてただ寂しいだけじゃなくて、そこにいくらか女性のエロシズムと言うと言い過ぎですけども、そういうほのかな女性らしい感じが漂っている。それを、じろじろ見てたんじゃあなくて、何となく身体全体で感じているのが牧水の歌であります。単に目でもってとらえるっていう言い方ではない。こういう歌なんかは、やっぱり小説家の好む歌ではないかと思えます。

いま入りに来しをみな子が負へる菜に雪は真しろく降りたり (『くろ土』所収)

今、人々の中に今入って来た女性が負っている、背負っている菜に雪が真っ白い雪がある。これも一つのそういう情景、前の歌の続きです。皆が洗っているそこへまた一人入ってきた。「いま入りに来し」と言っています。そこから歌い出すところがなかなか面白い。まあ点景と言えば点景、一つのスケッチですけども、しかし、このスケッチの底にそういう労働をしている女性達に対する牧水の心持ちが暖かく表れている。しかも「雪は真しろく」と言っているが非常に効いていますね。働いている。



第15歌集『黒松』(没後出版された最後の牧水歌集)

豆腐かもあらむ見て来よとわが言へば友出でゆきて鴨を持てきぬ (『黒松』所収)

皆で酒を飲んでた、肴がなくなっちゃった、豆腐でもあるだろう、まあ宿屋の台所に行つて捜してみたくれつて言うんですね。そういうと、友人が出て行く。そうしたら帰りには何と鴨を持って来た。豆腐ではなくて鴨、これは立派なものだなあ。それでまあそれじゃあ鴨を食べよう。こういう雰囲気がいかによく出ている。まあ冬の宿屋でしょうねえ。「豆腐かもあらむ」というところが牧水流だ。そうすると鴨を持って来た。勿論台所に下がってたんで

しようね。毛をむしつてね。そのままじゃあ困りますよ、鴨を持って来たって言ったって。その辺に浮かんでいるのを捕まえて来たわけじゃあない(笑い)。しかしまあ何となく人間らしい雰囲気が出ている。友達の姿っていう何となくそういう全体の人間的な感じが良いですね。次に

名はいまは忘れはてたれ顔のみのふるさとびとぞ夢に見え来る (『黒松』所収)

「忘れはてたれ」の「たれ」という已然形は、いるがという感じですよ。名前は今はもう忘れてしまっているが、顔ばかり覚えてる。だからそれが誰とは言えない。しかしあの顔は知っている、あの顔はという。そういう顔だけの「ふるさとびとぞ夢に見え来る」、この「ぞ」はなかなか上手い。この「ぞ」ができないんですよ。われわれは生まれた村なんでものを持たない人間なんですから、こういう感じがないんですけれども、故郷を持って故郷から遠く出て来た人にとっては、名前も忘れてしまった、顔だけはある、あの顔があったなあ、と思うのです。そういう故郷の人が夢に出て来る。まだ牧水は若いんですけども、この頃は体力的にも大分衰えている。何か牧水っていう人は、若いうちから老成した風格がありましたから、やや老境に近いような心境というのが、ここに滲んでいるように思われる。

珍しくけふ引網のかけ声の背戸なる浜ゆ聞え来るかも (『黒松』所収)

これは沼津の歌です。おそらく最後の家でしょう。



沼津市立図書館で講演中の玉城先生 (平成9年10月5日)

今度模型ができたそうです。浜が近いから網を引く掛け声が聞こえてくるんです。それが家の後ろの方の背戸の浜から聞こえて来るようだ。非常にさつぱりと歌っています。人間像というふうには、人間そのものは出て来ないんですが、しかし声というものは人間そのものを思わせるものであります。人間の存在感というものは、声でもって表れてくる。声を聞くことによって、人間の存在っていうものがわれわれに近々と感じられて来る。声は大変面白いテーマですね。声という題名で歌を募集してみたらどうだろうと思います。これは引き網をしている勿論漁師達がいるわけだけでも、その声によってああ人間の中にいる、人間の世の中に自分もいるという感じが

しみじみと伝わって来るわけです。このように牧水の短歌を十四首ばかり読んでみました。

こういう面から牧水を覗いてみると、牧水の違った面が見えて来るような気がします。どこで歌を選ぶかというようなことによって、その作者の別の面を発見して来るということも一つの楽しみであります。全体として言うとういうことになるでしょうか。人間を人間像として歌に詠むことは大変難しいんです。自然を通して人間を歌うことはできる。恋愛の心もちを歌うということも出来る。しかし人間像として歌ってゆくことは、短歌の伝統としては、比較的薄い面であります。古典からずうつとこの人間像という歌を抜いてゆくということも面白い作業であります。牧水の人間像も特色はどこにあるのだろうか。おそらく一つは、この時代に群衆、名もなき群衆というもの、はつきりと登場して来たということであります。西洋ではもつと早い。西洋ではもう十九世紀にアメリカのポー。その影響を受けたボードレール。彼らははつきり群衆というもの意識している。つまり都市の、パリの群衆、あるいはアメリカの街の群衆です。ポーに『群衆の人』っていう小説がありますが、これを見ると、朝から晩まで群衆と共に行動をして、群衆に付いて歩いて、明け方になると、また今日の一日を群衆と共に始めるという人間像が出て来ます。群衆というものが、明治の終り頃には日本でも登場して来る。ここに出てくる一人一人の場合でも、それは、群衆的存在の中の一人です。牧水には、やはり自分も一人の群衆の中の一人という感じがあるようですね。決して別の所から、ある一人の天才的歌人が遠くから離れた群衆を批判的に見るという見方は取っていないよう

です。群衆の一人が群衆の中の一人を感じる、あるいは群衆全体。「わがめくりいづれさびしく」というような、青年のむれ。これも固定した集団じゃあない群衆なんです。こういう群衆的存在としての人間、そしてその中の一人の人間の寂しさとか悲しみというものが、自然に流れ出て来るようにとらえられている。皆さんも、歌をお作りになる時に、自然を歌うのも勿論結構、それから自然を、勿論自然の中で人間の心持ちが歌えるんですけども、そればかりではなくて、人間像をやつぱりとらえてみようというふうな興味もお持ちになったらよい。

歌は、二三種類はお作りになったほうがよいと思う。毎月作るのにいつも自然では困る。家族は人間像にはなりにくいんです。孫っていうと孫を可愛いっていうのは、これは人間像じゃあない。孫を一人の人間として、人間像としてとらえたら面白い歌ができると思います。お金のこと自分の経済をどうしているのか、経済生活というものがあつてそれから何を幾らで買うか、そういう話も時には出て来ないかな。食べるものも出て来た方がよいですね。鴨でなくても豆腐でもよいから。それが歌の幅を非常に広げて、歌が非常に楽になりますね。いつでも思い込んだように、自然のことを歌わなければならぬ。田圃っていうえば田圃のことばかり歌っている。そういうふうな芸が一つじゃあとても苦しくて、やりきれない。時々いろんなものを入れて、二三種類作り別けて、まとめる時に上手にそれを配分してまとめるといふふうな毎月の歌をお作りになると、大変懐かしくなります。まあ人間像を努力をして、お作りになっていただきたいと思ひます。

「うた」主宰、毎日歌壇選者

第九回中学生短歌コンクール

その映像的表現について

曾根 耕一

(沼津牧水会監事)



中学生短歌コンクールの選を担当し、今回で二度目であるが、昨年との印象の違いに自分ながら少々おどろいている。昨年は素材の画一性(例えば、「キャンプファイヤー」と「きもだめし」、「あじさい」に「かたつむり」とかいた類)が目立ち、はじめて接見する中学生短歌とは?との戸惑いがあったのだが、表現に幅が見え、中学生らしい

瑞々しい視点と感性のオリジナリティーに気が付き、昨年の印象を見直す必要を思ったのである。

〈夏が来てビールがうまいと父が言う横目で私枝豆つまむ〉(原中二年 鈴木佳央理)素材のコント

ラストが面白い。「夏・ビール・父・枝豆」¹⁾「枝豆・横目・私」つまり、父と私を枝豆が仲立ちする夏の風物詩が語られており、そのマンガ的アレゴリーに感心させられるのである。

そして、次のような作へ「さような作」と言う言葉も言えなくて泣いているようなせんこう花火(暁秀中二年 横井利光)中学生でこのような比喻歌を見せつけられたが、この技巧性は、昨日や今日の大人の作の比ではない。その比喩の繊細さ「泣いているようなせんこう花火」のすぐれた感性を評価できよう。

さらに「この家も一年生がいるらしいプラスチックの朝顔のはち」(第二中二年 飯尾由利)この作、鉢をはちと言ひ、口語律の流れるような調べの会得ぶりに:ウーン:と言わされてしまう。

以上、二度目の選で気付いた所感であるが、このような所感を私の短歌視点として反省するとき、昨年見過ごしたものが今回は見えて来たということになる。それを一口で述べるのは難しいが、私たち大人の短歌観を今日の世代感覚を持つ中学生に押しつけてはならないということになるかと思う。

『短歌』九月号で、穂村弘が「近年の短歌の質は、あるところから大きく変化している」といい、それを「共同体的感性よりも、圧倒的個人の体感や世界観に根ざしたものと指摘するとき、その是非はともかくとして、今回私の接した中学生短歌も、その辺りに飛翔を秘めた可能性が期待できそうである。

ところで、今回も市内十二校から千三百十四首の応募があり、選を担当した須永秀生、川口和子、青木朝子、杉山芳春、曾根耕一の五名は、選歌に苦しんだ。今年は応募期限が九月中旬まで延びたため、初夏から初秋までの自然の移ろいの中で普段の生活の一場面を切り取った様々な作品がそろった。特選に推された作品は、それぞれ個性的な表現で優れた作である。選にもれた作品のなかにも特選に負けない良い作品が多くあり、質的な向上がうかがわれ、大変うれしいことである。

見たこと、感じたことをあらためて三十一文字に凝縮することにより、言葉に新たな生命が吹き込まれ、詠んだ本人自身にとっても新鮮な驚きや発見があったことと思う。

そのほかの特選歌をご紹介します。

わたくしを追い越して行く自転車の少女の帽子の黄色いリボン 第三中二年 村松 静香
稲妻を見てはすぐさま秒数をかぞえて距離を測る妹 第三中二年 古澤 圭介

話し声一つしない図書館の自習室には鉛筆の音 第五中三年 飯塚 貴子

退職後畑仕事に精を出す祖父の笑顔がとてもまぶしい 門池中二年 小林 圭
エアコンの音の向こうにある音は静かな夜に降る雨の音 門池中二年 村松 大輔

夏の夜の涼しい風をあびながら蚊取り線香ほろりと落ちた 門池中二年 山口 俊介
広島のドームの前に立ちつくし核の怖さに心裂かれる 第二中三年 柿本 友紀

なお、表彰式は、沼津牧水祭碑前祭当日が荒天のため沼津市若山牧水記念館ラウンジで行われた。